

樹木雑筆

原 秀 雄

ナラ類 ナラの類はブナ科の落葉喬木で、ミズナラをはじめモンゴリナラ（オオバナラ）、カシワ、コナラなどが北海道に自生する。海浜やそれにつづく地帯至るところにカシワの林の起伏することは、北海道では最も普通の景色の一つであり、またミズナラは各地の山野に多く自生し、またコナラは本道では北は岩見沢のあたり、東は十勝あたりから以南の邦内各地の乾地に自生を見る。カシワもミズナラ、コナラも共に材は家具、建築、薪炭、船、車、椎茸原木、染料などに用いられ、コナラは割合小ぶりの木であるが、ミズナラ、カシワのおりなす景観は頗る男性的で、殊にその老大な木々には雄大なものがみられる。これらの木は植の字をあててナラと総称することもあり、万葉集など歌書にもその名を見られるが、これは明らかに古くからこれらの木々が、これらの祖先の琴線にふれてきたことをもの語るものである。ハハソ、ホウソはナラ、本州のクヌギなどの古い名で、奈良、波々曾、加志波などの字を当てている。また庭に植えられたことは大和物語に見える。明治年間おそらく明治三十年前後ころに北米原産のアカナラ（上原・樹木大図説

にはアカガシワ）が取りよせられ、それは現在北大植物園に亭々たる姿をみせており、それから採られた実を蒔いたものが今植物園正門前から道庁西門に至る道路の両側に並木になつてゐる。おしいことに水産関係の建物が建てられた時に、心ない人によつていとも無雑作に伐りたおされてしまふ。北側の東の方が齒の抜けたようになつた。その上伐られた木に隣する一本が、それを悲しむかのように枯れて、甚だ体裁が整わなくなつてゐる。心ない伐木はこのように大きな傷をのこすもので、これは藻岩山の北側の樹林（原生林）をS字状にはがされたのと同じくらいに、われわれの心に苦々しい爪あとを残している。

ナラの類を庭などに植付けるには、他の諸木と適当にまぜて植付ける。取合せによつてはなかなか風情があつてよい。またこの木二―三本を植込み風に植付けるのも面白い。また並木に植付けるのにミズナラ、コナラ、カシワの類もよいが、ただカシワは秋枯れた葉が春先き近くまで枝に残ることがあり、なかなか枯葉のしまつがつかなくつたり、いつまでも日かげができていたりして困ることがある。ミズナラ、コナラにも多少その傾がないではないが、カシワほどのことはない。またアカナラはその木肌がカシワやミズナラなどと異なり頗る平滑で、その上木の姿も整つてゐるから、並木に用いて非常に壮大な観を呈する。道はばが広く、その上クモの巢のような電線が張りめぐらされておらぬ道路に、この木の並木が整然と植えられてゐる街なみというものは、考えただけでも立派なものである。

古くからいろいろの文獻にハハソ、ミジ、またナラモミジなどということばがみられるが、これはナラ類の葉の秋の紅葉をいつたもので、ナラ類の葉は、秋冷の候に多く黄から褐に変わり、また帯褐紅から褐色となる。土地と氣候との状態によつて異なるが、ナナカマドやメイゲツカエデ、あるいはヤマブドウ、ヌルデ、ツタウルシ、ヤマウルシなどのような真紅の色にそまるというのとちがひ、ナラのもみじはなかなかの風情にみちたものである。またアカナラの紅葉はナラ類の中でも異色のもので、全葉が褐色を帯びた濃紅色となるので、秋のこの木の紅葉は誠にみごとであり、壯観である。

並木はわが国では街道に各種の樹木を植えられたことがあつて、一里塚または並木などとして今に残つてゐる古いものも多いが、古い街道の並木にはマツ、スギなどの常緑木を用いたものも多く、市中の街路では冬日かげのできぬような落葉木を用いるのが常道となつてゐる。この点からいえば、秋葉の早く落ちる木が最もよいことになるが、(1)樹姿が美しく、(2)ある程度まで乾きに耐え、(3)剪定に強い、(4)落葉の早い、(5)落葉広葉樹となると、合格する木が少ない。そこでナラ類を見ると、いずれも落葉は遅い方であり、並木用に最もよいと思われアカナラといえども落葉が遅い性質があり、落葉の非常におそいイチョウよりもさうにおそいのがうらみである。

ナラ類の育苗は専ら実生による。この類の実は大粒、俗にいうドングリで、秋落ちるのを待つて採取するが、袋などに入れたままで春までおくとき乾きすぎて発芽しなくなるので、排水のよい冷涼な場所を選んで土中または砂中に貯えておき、春取り出して苗床や鉢などに蒔いて発芽させる。ただ気温のまだ高い時季に土中に埋めると発芽をはじめめるから、気温が低くなつてから埋める必要がある。この場合採取した種実はあまり乾かぬように涼しい室内におく必要がある。

ニレ ニレ科の落葉喬木であるが、老木は巨大な幹幹と枝の拡がりを持つこと、ミズナラやカシワあるいはそれ以上である。この木はハルニレ、アカダモ、ヤマニレ、ニガニレ、ネレ、ネリ、イシゲヤキ、ヤニレ、ヤキリ、ダモニレ、ノリニレなどの名があり、上原敬二博士の樹木大図説には六十七の和名、異名が記されている。東蝦夷物産志に『ツキサニ、ムカワの夷人はニイカブと云、亦楡（註・アキニレを指す）の一種にして其葉尖、大き棒の如し皮亦布となし又繩索となすべし、然れともアツ（註・アツニ、オヒョウ、樹皮の繊維は

強く美しく、織物とすることがあるのは人のよく知るところである。に劣る、布となして其色微赤にして旦アツの柔にして強きに如かず、松前の人これをタモギ、又アカタモと云、ツキサニ、アツともに喬木にして又大なるものは其困数抱に至る、夷人或以て舟となす。』とある。肥えた原野や湿りに不足せぬ溪谷などに自生するが、札幌付近にも原生林時代には多量に生育していた樹種の一つで、その名残りが北大構内や植物園などに残っている。昭和三十三年五月一日に植物園内のニレの一本を伐つたことがある。非常に大きな木であつたし、幹の基が空洞になつていなかった。地上五〇―六〇寸のところで年輪を数えることができたが、それによると、中心から北に一一四寸、西に三七―五六寸、南に七〇寸、東に五五寸を測ることができ、年輪一七八を数えた。つまり南北の直径一八四寸、東西の直径〇・九二―一・一一寸であるが、これによつて見てニレは割合に生長の早い木であることがわかる。この大きさを年齢わずかに二百足らずである。

が、ニレにはそのような心配は少しもない。また刈り込み、剪枝に強く、枝も丈夫なので、生垣用木としても価値が高い。従来ニレといえば薪材ぐらいに考えられることが多かつたが、この木は決して凡樹ではなく、材としても相当に硬さがあり、材の色も他木とやや異なるので、用い方によつては床板、家具材などとして面白い。ことに庭木としては夏の日かげを作る木としても面白く、よく育つたものは一本で相当の面積を覆うに足りる。

ニレの稚葉やわかい実を菜として食べるし、この種子は良質の油を有するので、種子を剥皮してゴマなどのように食べることのできる。それはとにかく、この木は植込みの中に一一二本あつてよい木であるが、また並木に用いてもよく、ことに北海道では郷土の木であり、むしろ見るからに痛そうな大きな刺の生えているニセアカシヤなどより、並木用樹としては北海道的であり、優秀なものであると思う。場所によつてはニセアカシヤは思わぬところに根からヒコバエが出て、時にヤブになつて困る

苗を作るには実生による。春四月末か五月初めに花を開き、六月には実を結ぶので、これを探つてすぐ床に蒔く、この種子は楕円形の薄い膜状の翼の真中に着いたような形なので、風に乗つてとびちりやすいから、一本実のなる木があると、その近くには六、七月ごろよく苗が生えるが、この種子は発芽能力を失いやすく、翌年の春まで貯えておくで発芽しなくなるのが常である。また自然に落ちた種子のうち、翌春になつて芽を出すものをよく見るが、これはクロバーなどマメ科の種子によく見られる一種の硬実であろう。

ニレの類は春近く、枝や幹の傷から樹液がもれるのを見られる。それでその時期に枝など切るとやはり樹液が溢れてしたり落ちるが、この現象はカンバ類、ブドウ類、コクワ、カエデ類、ミズキなどで見られる。このような木は春移植を行なうよりも、秋にこれを行なつた方があとの活着、生育が良い場合が多い。また枝の剪定を行なう必要のある場合には秋に行なうか、春ならば発葉後に行なうようにして、樹勢の徒な消耗を避けるようにする。(北大農学部講師)

黒ブドウ(カメルス)の房が昔は立派な房ができたが近ごろはバラバラの房になつて困るということをししばし耳にいたします。

優良桃苗木のお知らせ

ここ二―三年来、生食用および加工用としての桃の需要はいちじるしく増大しております。また、北海道においても管理に注意さえすれば、よい果実が収穫されるときも時期を選べば、大変有利な価格で販売されます。近時桃の苗木の需要は逐年増大して全国的に不足の状態にあります。皆さんの経営を豊かにすると共に、自家用として、夕げの食卓をより一層美しくさせるためにも、是非栽植をおすすめいたします。

食方早生

一本 一二〇円
十本 一、一〇〇円

次は今春販売する品種と価格をお知らせいたします。

白鳳

一本 一一〇円
十本 一、〇〇〇円

愛知県の坪内清氏により育成された早生の優良種にて、樹勢強健、病虫害にも強く大きい品質のよい優良種です。

大久保

一本 一二〇円
十本 一、一〇〇円

昭和二十六年に農林省登録品種となつた桃で大変熟期が早く、形がすこし小型ですが極早生種としては優秀です。

大久保

一本 一二〇円
十本 一、一〇〇円

葡萄カメルスの花振り防止について

黒ブドウ(カメルス)の房が昔は立派な房ができたが近ごろはバラバラの房になつて困るということをししばし耳にいたします。

この原因については、開花時の天候不良とか栄養不良とか地力の減耗とかいろいろといわれておりますが、特に密植した場合などは剪定がいきおい強剪定となり、また日射不足のため、貯蔵養分が不足し、栄養不良となつて花振いをおこすといわれております。

花振いの防止法としては、種々の方法がありまして、密植のところでは、間伐をして日光の透射と風通しをはかつて樹体のびのびと生育させて樹体の充実をはかるとともに加里肥料を多量に施用して貯蔵養分を増強して下さい。さらに堆肥などの有機質肥料を施し地力を増強する事も大切です。このほか、開花十日前ごろに第二果房の先端十枚ぐらいのところを摘芯することも花振り防止に有効といわれております。

(積丹の土田さんの質問に答えて)